

No.J2223

ラオス山地民とラム歌謡：内戦を生き抜いた宗教・芸能実践の民族誌

東洋大学 アジア文化研究所 客員研究員

平田 晶子

本書は、1975年の革命後、仏教化やラオ化の緩やかな同化政策が進み、さらに在来音楽の配信がオンライン化するという急速な社会変容が見られるラオス人民民主共和国を舞台とし、ラオス山地民のラム歌唱の芸能・宗教実践を描き出すものである。具体的には、既存研究がワールドミュージックの音楽市場で流通するラム歌謡を平地に暮らすタイ系ラオの伝統音楽と一対のものであると表象してきたのに対し、本書は、これまでその存在を十分に指摘されてこなかった山地に暮らすオーストロアジア系カトウィック語派のブルー・ソーのラム歌唱が生きる芸能、民間治療、信仰実践という社会的・文化的文脈に即した分析・議論を行った。

ブルー・ソーのラム歌唱の担い手たちは、厳しい自然環境のほか、仏領インドシナからの完全な独立と国家統一を目指した「30年戦争（内戦、ベトナム戦争、インドシナ戦争）」をラム・クロンニョと呼ばれる山地民の旋律を低地ラオに捧げることで戦禍を生き抜き、山地民の言語と平地民の言語で唄われる二つのラム歌謡世界を生きてきた。仏教化やラオ化という同化政策に対し、ブルー・ソーの人びとは、土着の祖先崇拝に深く根差した信仰実践を残すかたちで、外部社会から持ち込まれた信仰対象との相違を識別する仕組みを作り、山地民にとって重要な祖先崇拝を維持する調整を図っている。他方で、ラオスは内戦の影響で欧米諸国に多数のディアスポラを輩出しており、第1世代や第2世代の感覚をめぐる経験の複雑さが、国籍や性別や政治的思想の異なる人びとから形成されるオンライン・コミュニティで民族というバウンダリーを超えた音楽コミュニティを形成する上で活かされていることが明らかとなった。

本論文の刊行により、既存研究で等閑視されてきたラオス山地民の歌唱をめぐる感覚的な身体経験と、長きに亘る内戦を生き抜いてきた山地民の生の軌跡を開示するだけでなく、難民となって国外へ逃亡した山地民ディアスポラの身体に埋め込まれた独自の感覚や感性に関わる厚い記述から、五感が遮断されたオンライン状況下の感覚や感性の人類学的研究の発展に資する。